奈良・いかるが便り3　青葉号　影山建樹

1、 新緑の候・観光バスがやってきた

私たちが斑鳩へ来た頃、法隆寺の大駐車場に車はなく、土産物店なども開いていなかった。それが4月始めに修学旅行生の姿が見えるようになり、4月末には駐車場が一杯になってきた。開かれた店の前に若い人達が居るだけで町全体が元気づいて見える。

徒歩で隠れた歴史を尋ねて歩く人も多く、リュックを背負って元気そうに歩いている。下調べして来るのだろうが、老人センターの向こうにも人がいる。確かこの山には法隆寺の僧の墓があるというが、それを見学にいくのであろうか？　すごーい好奇心！パワー！

2、 イカルに出会う

竹取公園へ行った時、頭上を奇妙な声で鳴きながら飛んだ鳥がいた。私の耳では「ズイジイヒョー」と言った感じだが、『三光鳥』つまり『イカル』ではないのかと気づいた。注意して聞くと「ツキヒーホシ(月日星)」と三光に聞こえなくもないが、羽や体の色はよく判らない。

書物では「イカルは羽の色がまだらな鳩型の鳥。渡り鳥ではないが、五月ころから山野で見られる。ツキヒホシと鳴き三光鳥ということもあるが、三光鳥は別の鳥。嘴が太く、餌を転がすように食べるため「マメマワシ」とも言う。斑鳩と書いて『いかるが』と読ませるのは、鳴き声をイカル(怒る)と聞き、当て字したため。「が」は助詞。法隆寺を斑鳩寺というのは古くからの例があるが、斑鳩が地名になったのは明治以降」とある。

聖徳太子崇拝の念の強いこの地には「いかるが○○」や「○○イカルガ」の名称を持つ公共機関・事業所が極めて多く「いかるが読書会」とか「コール斑鳩」などグループの名称にも用いられている。明るい響きが好まれるのであろう。

数日後、空高く歌う雲雀の声を聞いた。久しぶりに聞くが、これも明るくてよい。

3、 片桐且元のこと

わが家の西、旧龍田城の城主だった片桐且元(1556~1615)は近江の人。秀吉に仕え“賤ヶ岳七本槍”の武将として知られる。しかし、その後の且元は武将というよりコーディネーターとして活躍したようで、太閤検地から寺社の改築などにその足跡がある。行政マンとしての且元の足跡は広範囲であり、彼が発給した領地に関する文書は相当量あって、単なる武人ではなく、当時としては第一級の近代化された経済人だったと思われる。

有名なのは関が原以後の豊臣家の顔(総奉行)としての仕事で、朝廷および徳川との難しい三立関係の中で特性を発揮する。しかし、時勢を見抜けぬ淀君などの身内からの反逆があり、結果的には豊臣家滅亡となってしまう。

この且元が斑鳩・龍田の城主となったのは慶長6年のこと、摂津茨木と合わせて約2万8千石の領主であり、賤ヶ岳の盟友、福島正則・加藤清正などとは比較にならぬ小大名ながら、秀頼の奉行として京都方広寺大仏殿の再建等に尽力した。城がある斑鳩の歴史旧跡を復興し、法隆寺も援助をしている。大阪夏の陣(1615)の後、京都三条の自邸で没。享年60歳。大徳寺で葬儀し、玉林院に葬る。静岡・誓願寺にも且元夫妻の墓がある。　なお、法隆寺の北、慈光院で武士の茶を興した片桐石州は、且元の弟(貞隆)の子(=甥)に当たる。

4、 ボケ封じ

外から帰ってきた家の前で、二人のハイカー婦人に声を掛けられた。「キチデンジはどこですか」とのこと。キチデンジ（清水山吉田寺）とは、わが家の南東150mほどのところにある浄土宗の寺で、通称「ボケ封じ」の寺である。天智天皇勅願という古刹で、境内に古墳もあるが、本堂の本尊は丈六、（高さ5m以上）・日本最大と称される木造の阿弥陀如来で、お布施を差出すと「ポックリ祈願・下の世話にならぬ」法要をしてくださるとのこと。世間一般にこの悩みの人は多いらしく、いつ行っても障子が閉まり読経の声がしている。

5、 大和の古寺の女たち

閉館間際に、あまり深くは考えずに「大和の古寺の女たち」という本を借りてきたが、わが家は長らく鳥坂・妙立寺の留守番役だっただけに、あれこれと面白く読めた。

内容は、大和一帯の古寺院に嫁いできた女性に、どんな因縁で結婚したのか、寺院を裏から支えていてどんな苦労があるか、といったことをリポートして記しているものである。当然、５５人の女性の話に同じものはない。しかしながら、何か共通するような面も感じられるのは、リポーター(編集者)のせいではなく、この地方特有の寺院や僧侶の在り方、それを支える周囲の認め方ではないだろうか。

徳川幕府は日本の平和を「封建制度」の確立に求め、「一村一宇」という檀家制度を作って村の人口動態の把握に寺院を利用した。キリスト教の禁止は宗門改めから戸籍作りなどに及び、葬儀や法事を重視して先祖崇拝に導く道は、僧侶の質の変化にまで影響した。

しかし、江戸時代前から、寺が学問や修行を重視する場であったり、貴族や武士などによって設立された寺院等では、檀家の数とは異なる経営があったと思われ、やむなく廃寺となることも多かった中で、懸命に生きることを求められてきたのであろう。妻帯が許され、世襲的になった明治以降の寺院における女性の生き方が見える。

本はＢ６版、１寺院３ページ、その中に寺を守る女性の写真・手書きのイラストと地図があって、十分なリポートとは言いにくい面もあるが、数多い寺院と女性を紹介するにはこれ位が良いとも思える。 ［ かもがわ出版(京都) 中島史子・藤田道世共著 (1994)］

6、 来年は『記紀万葉１３００年』

記は古事記、紀は日本書紀、万葉はもちろん万葉集のこと。来年は太安麻呂が古事記を書物にして１３００年に当たるそうで、日本書紀も万葉集まとめて各種のイベントが行われるとのことである。いずれもこの大和で生まれたものだから、ステージには事欠かず、大いに観光客を呼び込むことになると思われる。

これに協賛したわけではないが、私としては前号のタヂマモリのこともあり、９号線を北上し、奈良三条から少し西へ行って垂仁天皇陵に至った。ここは唐招提寺の西に当たるが、例により奈良の道は車向きに整備されておらず、後続車からは「早ク行ケ！」と警笛が鳴る。垂仁天皇といえば古事記では１１代目の天皇。（ジンム・スイセイと歴代天皇を数えられるのは戦前の子供）今の歴史学では存在が確定されていない天皇だが、堀に囲まれた立派な御陵があり、その堀の中の小島がタヂマモリ(田道間守)の墓だと言う。説明板もなく無愛想なもんだ。何もありゃしない。史実は大切だが、夢を追うのも良いもんだヨ。

夢といえば、魏志倭人伝に登場するヒミコのお祭りが奈良南部で行われるという。

７、 わが家訪問第一号はカズヨシ君

前日に電話があり「１０時半頃に車で行きます」との事だったが、定刻に広瀬の和義君がわが家へやって来た。転居後の来訪第一号である。清水を早朝に出たと言うが、私には出来ない仕業である。

以前に、彼は仲間を誘って東海道５３次を踏破した体験者でもあるが、郷土作りも熱心で、思いついたことはすぐに実行する行動派である。私はいつものわが家の抹茶タイムのあと、どこかで昼飯を一緒に食べようと考えていたのだが、彼は「先生の家を衛星通信で見ていて、赤い瓦屋根の家だと思ったが、それは隣の家のことだった」などといい、「これは先日の庵原中同窓会の時の写真。これは清水の「茹でしらす」。これから奈良町の方へ行き、写真博物館でも見て帰ります」という。知らないうちに衛星から覗かれていることにも驚いたが、彼のあっさり度もいい。

８、 新札は聖徳太子？

聖徳太子信仰は斑鳩や奈良だけのものではなく、日本全体にあると思われるが、誰が言うのか「次の一万円札には聖徳太子の像」という声があるという。紙幣は偽札防止のために何年か経つと新札が発行されるそうだが、現行の福沢諭吉札は既に発行番号が一巡したので、マイナーチェンジも施されているとのこと。（新札が手に入ったら旧札と比べてみてください）　他方、「聖徳太子像で新五万円札を」という希望もあるとかないとか。
すでに千何百年も経っているのに、スーパーマン聖徳太子の人気は凄いものですね。

９、 斑鳩人気質？？

農産物直売所の入口で、女性たちが口論していた。一人は老婦人で「私の荷物を勝手に移動させた」と怒り、対する若い娘の二人連は「みんなが使う腰掛けに置いたあんたが悪い」と反論しているらしい。互いに譲らず、ありったけの悪口雑言を吐きあっている。

私はかつて、中国の町中でののしり合う光景をよく見たが、日本で見たのは久しぶり。（戦後の闇市場にはよくあった）。どちらかが「ごめんなさい」と譲れば済むことだろうに、あくまでも正当を主張し続けて引く気はないらしい。

コンビニでコピーを取ろうとしたとき。一歩遅れて入って来た人がいたので「私のは少し多いのでお先にどうぞ」と譲ったところ「それなんいらんわ！」とその男は怒って出て行った。譲られるのは沽券に関わるとでも言うのであろうか。

信号機のない交差点では互いに譲り合うことが大切だが、多くは「図太い者優先」で、「有難う」と礼を言うのは嫌いらしい。

スーパーマーケットで「大震災への心からのお見舞い・被災地援助のため入荷が少ない。懸命に努力しているので何卒お許しください」との言葉が繰り返して放送されている。

災害発生以来もう二カ月も過ぎたが、ずっと同じ。しかしながら、店内では店員を大声で非難する客をよく見かける。瑣末にこだわり手前勝手な人が多いのだろうか。

他用があって大阪へ行った。大変な人込みだが、電車でもバスでも席を譲って頂いた。礼を言うと必ず返事が帰ってくる。知らない人と挨拶を交わせるのがこんなにも心温まるものかと久しぶりに心が豊かになった。東日本大震災の援助は勿論のこと、心の平和は挨拶と笑顔からと思わせられる。無財の七施は無料で出来る。

10、 五月晴れ濃い磯の香と人の情

会合に出席するため二カ月ぶりに清水へ来た。駅前の工事が進捗中で、風景も変わりつつあるが、車がない私にはバス乗り場が不案内で困った。「あしゃあどうしていいだか判ンねえ」とつぶやく老婆がいたので聞いてみると「袖師へ行きたい」とのこと。二人で乗り場を探す。

清水で密に期待していたのは、偶然に知人に出会うことだったが、駅前銀座の入り口で見覚えがない女性に声を掛けられた。「私、中学生の時、先生に音楽を教わりました」と言い、「今、原水爆禁止の署名を集める運動をしています」という。私の祖父母の広島の家は原爆で焼かれ、母の妹も亡くなっていることなので署名に応じたが、その女性からはその昔の思い出が次々と語られ一緒に署名運動をしている人たちも奇遇を喜んでくれた。

清水行きの目的の一つである図書館へ行くため、三保線で新清水へ行き、電車に乗ることにした。清水在住の頃に、電車に乗ることはほとんどなかったことである。
調べを済ませて、今度は「まちなか巡回バス」に乗る。１回１００円と格安なのに乗客は私一人であり、勿体ない。

波止場で降りたが、バスのドアが開いた瞬間に磯の香りがどっと押し寄せてきた。
「これだこれだ。これが清水だ。海のない奈良では味わえない清水の香りだ。」

丁度、干潮の時刻らしく、濃厚な風が全身を包む。大いに満足してドリームプラザへと歩いて行き、清水駅へ行く無料バスに乗せてもらうことにした。商売として、人集めにこのようなサービスは当然になってきたのかもしれないが、有難いことに思える。利用者もほどほどにあり、活用されていることが判る。

予約してあったホテルへ来て、また知らない女性に声を掛けられた。「影山先生でしょ。瀬戸先生のご葬儀のとき音楽葬をなさったのを覚えています。その後、清見潟の講座に入れて頂いたので、通信などで先生の文を読みました」とのこと。どうやら瀬戸先生の教え子だった人らしいが、こうした方に声を掛けて頂けるのはとても嬉しいことである。

夕方からの会合とその後の懇親会では、大勢の方々と久しぶりの再会と交流があった。宮城島元市長も参加され、いろいろと激励の言葉を掛けてくださる。旧友と飲み交わす酒は格別である。

11、 奈良のＢ級グルメ

前号でお知らせした『奈良Ｂ級グルメ決定戦』が、昨年「平城遷都１３００年」で賑わった平城宮跡で行われ、大勢の人が試食し投票して順位を決めた。

優勝＝大和焼きそうめん　２位＝大和ポークの角煮フライ　３位＝ならもんあんかけ

その他に「大和牛コロッケ」「吉野葛入りソウメン」「イノシシ焼き肉」など。

奈良が姉妹都市提携を結ぶ「中国西安」は、遣隋使・遣唐使の昔は世界一の大都『長安』と呼ばれ、洋の東西から運び込まれた品物が東の市(いち)と西の市で扱われて大層な賑わいだったと言う。長安の都を模したといわれる平城宮跡で、今回の「奈良Ｂ級グルメ決定戦」が行われたのは意義深いものであるし、これが良い刺激となって全国に知られ、さらに旨いものが出てくることを期待したい。

奈良に古い良いものがあることはよく知られていることだが、座して待てば観光客が来た時代は変わりつつあると思う。交通体系の改善を含め、活動できる奈良が期待される。